

心が躍るダンスで人々を笑顔に

～認知症予防運動プログラム「ココロからダンス」～



写真提供
日本歯技

振付師・南流石さんといえば、数々のアーティストやテレビCMなどの振り付けでお馴染みです。NHK紅白歌合戦の振り付け演出は、もう19年も続けていらっしゃいます。その南さんがこの度、岩手医科大学の高橋准教授との連携により、認知症予防のための運動プログラム「ココロからダンス」を制作されました。制作を進めていくうちに、認知症予防や運動不足解消といった当初の目的とは違う効果が表れたそうです。単に長生きするのではなく“健康で”長生きするために、QOLの観点からも大きな可能性を秘める「ココロからダンス」。その取り組みやこれからの課題について、南さんにお話をお伺いしました。



振付師
南 流石氏

イメージを形にする

—— 本日は数多くのアーティストやテレビCM、舞台の振り付け等でご活躍されている南流石さんにお話をお伺いいたします。振り付けを通してアーティストの成功を支えているという点で、私たち歯科技工士と似ているところがあるように感じています。よろしく願いいたします。

南 よろしく申し上げます。

—— 南流石さんの芸名はサザンオールスターズの桑田佳祐さんが名づけ親だそうですね。

南 桑田さんに会ったのは20数年前ですが、私がつくってきた踊りというのは、その時代にはまったくなかった踊りでした。それを桑田さんの事務所の方がご覧になったのをきっかけにツアーメンバーに入れていただいたのですが、桑田さんにとっても初めて見る感覚の踊り

だったようで、ご自分が想像していた踊りとまったく別の世界を私がつくりあげたものですから、何か踊るたびに「さすが南、さすが南」とおっしゃってくれました。

それである日、いくつかの仕事を終えた後に桑田さんが「俺が名前を付けてやるから改名しろ」とおっしゃって、書で書いてきてくれたのです。「お前には書道家みたいな名前が合っている」というようなこともおっしゃっていましたが、それが「南流石」でした。当時の彼の口癖「さすが南」がそのまま名前になったわけです。

—— サザンオールスターズの他にも、福山雅治さんやスマップ、大塚愛さんなど、誰もが知っている有名人とお仕事をされていますが、これまで特に印象に残っているお仕事はありますか。

南 本当に数えきれないぐらいの方と出会って、アーティスト本人のデビュー前から指導している方もたくさんいます

から、どれが印象に残っているかを選ぶのは難しいですね。ただNHKの「紅白歌合戦」の振り付けは19年担当していますが、本来は各アーティストが歌を歌うだけで成立するものを、歌詞がもっと伝わるように、あるいは本人が表現したい世界が視覚的にも分かりやすくなるように、音楽に寄り添う二番手の役割として振り付け演出をしています。

アーティストともそういう気持ちでおつき合っていますが、一番大切にしているのは、結果を出すことはもちろん、その結果が出るまでの期間をどれぐらい濃密にアーティストに寄り添えるかということなんです。

例えば福山君であれば、福山君のデビュー前から「福山雅治という人間はこんな感じだったら世の中の人々がきっと喜ぶだろう」と私が想像して、その道を彼に示していきました。それから大塚愛さんであれば、今までヒット曲もたくさんありましたが踊るという作業は一度も

やっていなかったの、大塚愛さんを好きな人たちが好きではない人たちが何を求めているかを想像して、踊ったりダンサーを入れたりという方向性に導いていきました。

その想像を確実にアーティストに合わせるために、とことん自分を追い込んで想像しなければ大変な間違いを犯してしまいます。その意味で、すごく濃密な時間をアーティストと一緒に育んでいるので、今日までのどの仕事も一つとして欠けてはいけなかったと思っています。

—— 私たちも作業模型を見て、最終的にセットされる補てつ物を想像しながら理想的なものを作っていきます。しかしこの想像を間違えると大変なことになります。なんとなく似ていますね。

南 アーティストのイメージを最終的に目に見えるものに落とし込むのが踊りです。「何かこんな感じなんだよね」というアーティストの会話を基にしてアウトプットする。その意味では、ドクターのイメージを目に見えるものとして形にする歯科技工士さんと共通点がありますね。

踊りというのはすごく軽い気持ちでもできるものなのです。単に楽しんでもらえばいい。そうではなくて私は、踊る人も見る人も、私と出会った人すべてが確実に喜んでもらえるところまで行きたいと思っています。

—— そのためには大変な努力が必要ではないですか。

南 “生きざま” しかありませんね。自分がどう生きていくかがすべて表れますから。だから私はいかに美しい生きざまをするかということをテーマにしています。それが結構やりがいがあって面白いです。

言語を超えた コミュニケーション

—— 南さんのダンスはコピーではな

くてオリジナルの魅力があるという評価を聞きます。オリジナルということについてご自身ではどのようなお考えをお持ちですか。

南 私は“心が躍る”ということテーマにしていますが、それがおそらく私がオリジナルだと言われる所以ではないかと思っています。

日本の踊りは型をつけることが主流です。だからステップを組み合わせたり、海外のものをアレンジしたりするものが多いのですが、それは作った人の心を受け継いでいるとは言えません。踊りを生み出した人には心や意図がちゃんとあって、いろいろな思いの中で踊りが生まれているはずなのに、形だけいただいていることが多いのです。

そうした踊りというのは、ただ型をやっているだけで心が躍っていません。私はそれをずっと見てきて、「これは絶対に違う。私が作るのであれば心が躍らなければ駄目だ。私から生まれるものを人に伝えていくことで、かつていろいろなジャンルの踊りを作った人がいたように、本当の意味で心が躍る踊りが浸透していくはずだ」と若い頃に思いました。

だからオリジナルというのは、間違いなく言えることは、私から生まれているものだということ、私にしか創れないものだということです。

—— 先ほど“生きざま”という言葉がありましたが、それが自然に自分の中から出てくるということなのですね。

南 そうです。だからこれまで何千作品という振り付けをしてきましたが、「〇〇風にして」と言われても資料などは一度も見たことがありません。「〇〇風ってどんな感じだろう」と調べたりせず、あの人は何を求めているのだろうとか、あの人がどうやってらっている人が喜ぶだろうということを想像しながら、自分の考えが出てくるのをひたすら待つて、それを形にしていきます。南流石オ

リジナルはそういう作り方です。

—— 素人の意見ですが、南さんの振り付けは手の動きや上半身の動きが他の人と違うように見えます。紅白歌合戦などを見てパッとダンスが目に入ったときに、「これはたぶん南流石さんだな」と分かるときがあります。

南 そういう反響をいただくのが一番嬉しいです。変な話ですが、今、「南流石風」というのがはやっているようです。海外のダンスがコピーされてきたのと同じようにコピーされているわけですから、良い意味でとらえれば嬉しい気持ちもありますが、私は後輩の指導もしているので、「形だけ真似しても何も伝わらないから、生み出す作業を真剣にしなければいけない」と伝えています。

自分のオリジナルを頑固に生み続けるというのは並大抵ではありませんから、どうしても皆、近道をしがります。楽をしようと思えばいくらでもできる。そこを志高く、誇りを持って生き抜いていける人が増えてほしいと思っています。

—— オリジナルを生み出すためには基礎が完璧にできていないといけませんよね。南さんは3歳からクラシックダンスなどあらゆるダンスを習ってこられたそうですが、そうした基礎があるからこそできるということでしょうか。

南 考えたことを自分の体でしっかり表せなければ相手に教えられませんから、子どもの頃に理想的な体の動きを学んだことは確かに大きいと思います。

ただ私の場合、いろいろな踊りを通りやって、最終的にはそれを全否定したのです。サザンオールスターズに出会う少し前だったと思います。何も知らないで全否定するのは若気のいたりになってしまうので、それなりに突き詰めてやって、その上で二度と何も習わないと決めました。自分の踊りを生み出そうと決めたのです。

すでにある踊りを続けていても、それ

は結局コピーに過ぎません。そうではなくて自分の踊りを作りたいかったのです。

—— 南さんにとって体で表現することの魅力とは何ですか。

南 私たちは『普遍言語』と言っていますが、言葉のコミュニケーションではなく、言語を超えたコミュニケーションであるということです。ただ話をするだけでは意思が伝わらない場合でも、私が心を込めて作った踊りや体の動きを見れば簡単に飛び越えられます。説明などしなくても心が通いあうのです。

今年の1月にハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジで講演する機会があったのですが、私が日本語で説明しても現地の人は当然分かりません。それでも踊りをやったら皆が同じようにやってくれて、いつの間にか同じ時間を共有している。これはすごく特別なことだと思います。

日本でも、子どもを相手にしているときなどはそうです。説明しても分からないぐらいの小さい子どもと一緒にやると、子どもたちがつまらないと感じていたら、心が動いていないということが簡単に伝わってきます。言葉ではなくてリアクションで分かるのです。そのように言葉の説明で成り立っているのではない

ということが普遍言語の踊りの面白いところで、今、一番夢中になっていることです。

—— 言葉では表せないことが表現できると。

南 先日も、「ココロからダンス」という認知症予防の運動プログラムを振り付けした関係で、岩手県に行って副知事を表敬訪問したのですが、皆がしーんとしている空気の中で私が「せーの、はい！」と言ってポーズをとったら、副知事もやっちゃうんですよ。一瞬空気が凍ったのですが、「副知事、指先に力入れて」と言ったら力を入れちゃう（笑）。

そんなこともちょっと遊び感覚でいろいろなところで試しているのですが、そうしたコミュニケーションが踊りの一番面白いところだと思います。

想像することの重要性

—— クリエーターチーム「流石組」を主宰されていますが、流石組はどのような活動をしているのですか。

南 流石組にはダンサーだけではなく、演出家やカメラマンやCGデザイナーなどいろいろなクリエイターがいます。確かにダンスを志す人が多くて、そ

ういう人は私の踊り作りの現場に出演する仕事が多いのですが、私は別に流石組を踊りの集団にしようと思っているわけではないので、踊りのレッスンというのとは一度もしたことはありません。

私が教えているのは、現場に参加させながらゼロから物をつくって

いく段階を見せること、人の心が動いていく段階を見せることです。流石組の活動を説明するのは難しいのですが、それが活動だと言えます。

だから紅白歌合戦にしても、流石組から多い時には100人以上が参加したりするのですが、テレビで放送されることだけが目的ではなくて、本番に向けてのリハーサルの時間が重要です。私はリハーサルを2週間はやることにしているのですが、この期間を非常に重視しています。ステージに立つダンサーはそこで積み上げていった結果が画面に出るわけですし、ダンサーではない人もゼロから物をつくるということを経験して学ぶのがこの期間だからです。

これは流石組の人間に限ったことではなくて、NHKのスタッフ間の中では“流石塾”という言葉があるみたいです。何も知らない新入社員の頃に私の担当になると、クリエイティブな現場で物を作り上げていく工程を見られるわけです。19年も担当していると、19年前に新入社員だった人が今はプロデューサーになっていたりして、そういう社員がたくさんいます。本当に嬉しいですよ。「頑張ったね、よくやったね」みたいな（笑）。

それから福山君もいまだに「俺が今いるのは流石さんのおかげだ。俺は初代流石組だ」と言ってくれますし、パフィーや大塚愛さんもそうです。アーティストがそういう気持ちになってくれるというのは、人に何かを伝える工程を重視しているという私の考えを理解してくれているということですから、やはり嬉しいですね。

—— そこがクリエイターチームと呼ばれる所以なのでしょうね。

南 流石組は、単にいろいろな現場に出てくるダンサーチームとか振付師集団と思われることが多いのですが、実際にやっていることは全然違います。つくり上げていくまでにものすごい時間がか



左から南流石さん、官館岩手県副知事、高橋岩手医大准教授

かっていて、そこに流石組のいろいろなエッセンスが詰まっていますから、ミーティングをしている時間のほうが長いのです。

ミーティングでは毎回、必ず何か話しているのですが、うまくできなくて暗い顔をしている子がいたら「その現実を受けとめて、なぜそうなったのか考えよう」とか、一人ひとりと話をしているので、涙あり笑いありのよく分からないミーティングになっています。紅白のスタッフが「これ踊りのミーティングなの？」と言うぐらい（笑）。しかしそれが画面に表れて、先ほどおっしゃっていたように他と違うということにつながっているのだと思います。50人が一糸乱れずに踊るなどというのは数回のリハーサルで生まれるものではなくて、心が一つにならなければいけないのです。

だからダンサーの振り付けの現場で「思いやり」という言葉が出るのは私たちだけみたいです。大勢で踊るときには思いやりしかありませんから、思いやりとか人の気持ちを考えろとか、そんな言葉しか出てきません。私は気持ちの言葉で踊りを教えていくので、流石組の現場はちょっと珍しい作品創りの現場になっています。

—— 若い人を指導する上で特に心がけていること、あるいは若い人にこれだけは理解してほしいということはあるですか。

南 若い人を指導してきて思うのは、先入観や潜在意識のみで生きている人が多いということです。踊りでいえば、こんな感じにすれば盛り上がっているように見えるとか、こんな感じにすれば優しそうに見えるとか、どこかから聞きかじったりビデオを見たりした記憶のみで成り立っている人ばかりなのです。私は「自分のDNAにないことはするな」「自分の生き方を踊りにしなさい」と指導しているので、いかにそうした先入観を



捨てさせるかを重視しています。

結局、皆、自分で自分の世界を狭くしているのです。私たちの世界は正解がないのに、自分で「こんな感じ」と答えを決めてしまっている。それは意味のないことです。だからまずはその精神的な部分をチェンジさせていくことに一番力を入れています。

それから、人の心を動かす踊りをしたかったら踊りのレッスンだけでは駄目です。レッスンを受けたり体を鍛えることなんて、ダンサーを志しているなら当たり前のことです。そんなことで満足するのではなくて、生き方や考え方こそが踊りに表れるので、そこを重視しなければいけません。だから、これだけは理解してほしいというのは、踊り以外のところを心得てほしいということです。

これまで学校の舞踊科などでは「まずあなたが楽しみなさい。あなたが楽しめないと見ている人も楽しくないから」という指導をしていました。しかし、それが大きな間違いだったのです。皆が勝手に自分で楽しんで踊っているだけでは何も生まれません。「うまいね」で終わり。

それでは何のために踊っているのか分かりません。寄り添うという気持ちが大切なのに、「寄り添わなくていい。あなたが楽しめば見ている人は楽しいから」と学校の先生が教えてしまう。だから今のダンサーは、技術は上がっているかもしれませんが精神的に心が育っていないのです。人の心に届く踊りを踊れる人が育っていない。

それで今、私はそれを修正して「自分が楽しむのではなく、まずは相手が楽しむことを考えなさい。相手が楽しんでいるのを見て初めて自分が喜びなさい」という指導をしています。自分だけが楽しんで喜びを得るよりも、自分のしたことで相手が涙を流して喜んでくれたら、そのときの喜びは計り知れないものになります。それを体験できないことは不幸なことです。小さな喜びを目指すのではなくて、自分のことではなく人のことを考えたら喜びがこんなに大きくなったという体験を皆にしてほしいのです。

—— 確かに「自分が楽しめ」という言葉はよく聞きますね。きれいな言葉ではありますが。

南 ダンサーだけではなく制作現場のスタッフにもこういう話をし、視聴者やお客さんの気持ちを想像しながらつくりたい、という言葉を聞いて、「それだけを考えてつくれたら苦労しませんよね」という言葉が必ず返ってきます。予算はこれだからここまでいいよとかいう答えが出てくるのですが、私はどんな現場でもこの意識を忘れてはいけないと必ず言っています。

作品を見ていただく人、楽しみに待っている人のことを考えて、そこに向かっていくという心を全員が共有しなければ感動には到達しません。例えば離島などでNHKしか映らないような地域の人、紅白を毎年とても楽しみにしているわけですから。

踊りの型を教える人はたくさんいますから、それはそれぞれのジャンルの先生方に任せて、私はそうした精神的な指導を重視しています。

—— 非常に深いお話ですが、よく分かります。われわれ歯科技工士は失われた歯牙や歯列を回復することが役割ですが、模型上で自己満足しがちです。しかし本当は、患者さんにそれをセットし、患者さんが機能的・審美的に満足できて、それで初めて自分が満足しなければ

いけないのです。

南 先入観や潜在意識を捨ててちゃんと想像しなさいと言いたいです。その作業を面倒臭がらずにやり続けるしかありません。それはどの仕事でもきっと同じですよ。

最大の効果は 笑顔が生まれたこと

—— 先ほど少しお話に出ましたが、昨年、岩手医科大学の高橋智准教授との連携により認知症予防のための運動プログラム「ココロからダンス」を制作されました。この取り組みはどのようなきっかけで始められたのですか。

南 高橋先生は認知症の権威と呼ばれている方で、認知症を予防するために運動神経を活性化させることに着目されました。

先生によると、人間は記憶などがなくなったとしても運動神経は最後まで残っているそうなのです。子どもの名前は忘れてしまっても、箸を持つとか、歩くとか、自転車の乗り方は覚えている。だったらそこを活性化させておけば認知症の予防になるのではないかということで、その試みの一環としてこの運動プログラムを考案され、声をかけてくださったのです。そこから「ココロからダンス」プロジェクトが始まりました。

—— 医学界との連携は南さんにとっても初めてだったそうですが、戸惑いや難しさは感じませんでしたか。

南 特に認知症の知識があったわけではありませんが、私はこれまでも芸能人や子どもや老人など

さまざまな領域を対象とした活動をしてきましたから、スムーズにその人たちのことを想像しながらつくる作業に入れました。

振り付けを考える際は実際に老人ホームや介護施設の現場に行き、患者さんと向き合いながら一緒に作っていました。座ったままとか寝たきりの人が多いですから、その人たちから感想を聞きながらいろいろなことを試して、「これは難しいよ」と言われたら「じゃあ、これだったらどうですかね」というコミュニケーションを何回も繰り返しながら一つ一つのプログラムをつくり上げたのです。

そうするうちに、認知症の進行を遅らせるという先生の当初の目的とは違うことが起こり始めました。何かと言うと、患者さんに笑顔が生まれたのです。それまで介護士さんがいくら話しかけても無反応だった患者さんたちが、私が「南流石です」と入っていくと「待ってました」と言わんばかりの笑顔になったのです。これは病院側が驚くぐらい画期的なことでした。

いろいろお話を聞いていくと、入院されている方は一日に一度も楽しい出来事がないそうです。一日中ずっと座っているだけ、ずっとテレビの前にいるだけ。それはきっと日本の福祉に問題があって、介護士さんが不足しているという理由もあるのだと思います。人数が足りないから皆が忙しくなる。その結果「はい、運動しましょう。次は食事。次はお風呂」と流れ作業のようになってしまっているものではないと思います。しかしそのような状況では、笑顔が生まれる時間はあまりなかったわけです。

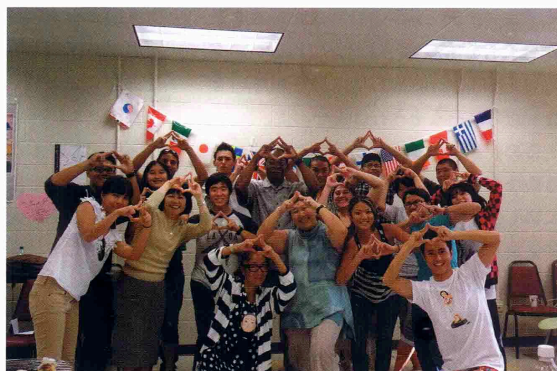
その中で私が通うことによって笑顔になったり、「帰らないでほしい」と泣かれたこともありました。あらゆるミラクルな現象が起きたのです。介護士さんの中には「あまりいろいろな曲をやっても



介護施設での「ココロからダンス」実演



ハワイ大学学生とのミニデモンストレーション



ハワイ大学の学長や学生たち

患者さんは覚えられないかもしれない」
 と思っている方もいたようですが、私が
 現場で見る限り決してそんなことはなく
 て、曲だってちゃんと分かるのです。介
 護士さんたちは医学的な見解に基づいた
 答えで向き合っていますから、決めつけ
 てしまっているのですね。

医療の専門家ではない私が偉そうなこ
 とを言っではいけません、だからこそ
 私なりの接し方で普通に接すると、会話
 だってちゃんと成立します。「この服ど
 うですかね？」と聞いたら「宇宙人～」
 と言われたり、「こういう動きはどうで
 すか？」と聞くと「それは難しいよ」と
 言われたり。なぜかいつも怒ってばかり
 いたおばさんが最終日に「あんたは大丈
 夫だよ」と言って握手してくれたりもし
 て、それには泣きそうになりました。

—— 先ほどおっしゃっていた、まず
 は相手のことを考えるという気持ちがも
 たした効果だと言えますね。

南 医学的に想定されていた効果とは
 違ったのかもしれませんが、結果的に笑
 顔が生まれたということが私は最大の効
 果だと思っています。このプロジェクト
 は当初、「ふだんあまり動かないから、
 ちょっと体を動かしましょう」という考
 えが入り口でした。しかし踊っているう
 ちに患者さんは楽しくなってきて、「頑
 張ってあと5分運動しなければいけない」

というのではなく「楽しんで踊っていた
 らいつの間にか5分たっていた」という
 現象が生まれた。それが笑顔につながっ
 たのだと思います。

それからもう一つ、ワークショップな
 どを通して介護士さんに覚えていただく
 ことで、介護士さんが患者さんに教える
 ことに面白味を持ち出したことも大きな
 効果だと思います。なかなか時間をつく
 れないから、風船を膨らませたりお手玉
 をやったりということしかできなかった
 けれども、これからはこのダンスで患者
 さんともっとコミュニケーションを取れ
 ると喜んでくださいました。

だからこの「ココロからダンス」に
 よって笑顔が生まれたというのは、踊っ
 て面白いというだけではなく、それを覚
 えて人に伝えるところにも面白味が生ま
 れているからだと思っています。「伝える」
 というのをテーマに活動している私た
 ちとしては、その重要性が証明できたの
 ではないかと思っています。

こちらから一方的に運動を押し付ける
 のではなく、患者さんと教える側がお互
 いに伝える喜びを共有しながらコミュニ
 ケーションをすると、患者さんも患者さ
 んなりに考えたり、ふだん使っていない
 手を動かしたり、自分の体を触ってみたり
 します。そうすると生きているという
 ことを実感できるのです。

最近はQOLというのがいろいろなど
 ころで言われているようですが、一日で
 一度も笑わなかった人が、ダンスによっ
 て「ああ、今日も生きている」と感じる
 ことができたなら、そこに一つの喜びが生
 まれます。その意味で「ココロからダン
 ス」は大きな可能性を秘めていると思っ
 ています。

伝えていく人を増やしたい

—— この活動はこれからますます広
 がっていきそうですね。

南 私たちは本当にどこへでも行きた
 いと思っています、できる限りやろうとし
 ているのですが、それが今は悩みでもあ
 ります。つまり行政サイドに「こういう
 活動はボランティアでやるべきだ」とい
 うような意識があるのです。

私一人がボランティアでやるのは構わ
 ないのですが、私はこれを伝えていく人
 を増やしたいのです。いきなりボラン
 ティアでやろうと言っても増えません。
 だから国がこうした物事に目をつぶらな
 いでほしいと思って、ちゃんと予算をと
 りませんかという話をするのですが、
 「こういうことでお金を取るなんて…」
 というような変な空気になる。

そうすると私は後輩を育てられないの
 です。アルバイトをしながらダンスを学

んでいる後輩たちが、一日1万円もらえるバイトを休んで、なおかつ地方への交通費を自分で出さなければならないとなったら、そうそう行けませんよ。

この問題は本当にどうすれば解決できるかなと思っていて、今はテレビや雑誌に出していただくたびに、これこそ大切に必要のことだからこの問題を直視してほしいと訴えています。ボランティアの人たちがやっているからいいではなくて、これをボランティアではなくしてほしいのです。やりたいと言ってくれる人はたくさんいるのですが、実際問題としてなかなか続けられないでいるのですから。

—— 1月に行われたハワイ大学での講演はどのようなきっかけだったのですか。

南 「ココロからダンス」のDVDを全国のさまざまな介護関係者や医療関係者にお配りしましたが、その中の一人がハワイ大学の教授でした。ハワイでも高齢化が深刻な問題になっているそうで、大学のカリキュラムとして取り入れたいと嬉しいお誘いをしていただきました。

それで講演をしてきたのですが、本当に喜んでいただけました。教授も真剣に取り組んでくれますし、学生も心がある優秀な学生たちだから、これを自分たちで英語に訳して自主的に老人ホームや病院を回ったりしようとしてくれています。

—— これもやはりボランティアですか。

南 そうです。3月にもハワイの高齢者施設や病院でのワークショップ、大学でのイベントを開催したいということなので、この活動をもっと広げてもらうために学生を指導するという目的もあって私はまた行くのですが、前回、日本から参加したメンバーの中には、行きたくても行けないという声もあります。

だから今はそんな問題に直面してい

て、伝えるすべが限られてきてしまうことが本当に心配です。私一人がやっても仕方なくて、増やさないと駄目なのにそれができない。本当に何とかならないかなと思っています。

こういうことは誰に言えばいいんですかね。行政刷新大臣の蓮舫さんは、彼女が芸能界にデビューした当時の指導を私がやってきたので、そこへ持っていこうかな(笑)。

—— 確かに国の政策には時に疑問を感じる場合があります。例えば特別養護老人ホームの食事は軟らかいものや細かく刻んだものが出されます。しかし、すべての患者さんに良く噛める入れ歯を提供し自分の力で良く噛み排出できるようにすれば、認知症などの発症が減っていくということがいろいろなところで証明されています。

単に長生きすることではなくて、本当は“健康で”長生きするための施策こそが必要なはずです。亡くなる直前まで自分で食べたり、自分で動いたり、自分で考えることができる人が増えるほうが良いにきまっています。そうしたことを行うのが行政の役目だと思います。

だからといって嘆いてばかりいても仕方ありませんから、できる範囲でやっていくしかありませんね。

南 そうですね。戸惑うこともありますが、実際にこのDVD1枚でこれだけの反響があって、今まで出会えなかったようないろいろな人に会えて、その人に伝えたらその人がまた誰かに伝えてという動きが生まれています。

だからこれからもいろいろなところに行く計画を立てていますし、興味のある方はどんどん呼んでほしいと思っています。とにかく伝えたいのです。伝えて小さな南流石を増やしたい。呼んでくれなかったら勝手に引っっちゃうかもしれません(笑)。

数珠つなぎの世代間交流

—— 南さんは振付師から振産師と呼ばれることへの変更を望んでいらっしゃるようですが、これは先ほどお話ししていただいたオリジナルということにつながってくるのでしょうか。

南 言ってみれば私自身の決意表明です。振付師というカテゴリーでぬくぬくと生きていくのではなく、自分で振産師というジャンルを立ち上げて、その責任をちゃんと取っていく。そして芸能界の活動も「ココロからダンス」の活動もすべて含めて、“振産師・南流石”という他にはない存在として、物を生み続け伝え続けていきたいという決意の表れです。

—— 最後に今後の抱負をお聞かせください。

南 今後は、今まで数十年かけてやってきたことと最近の「ココロからダンス」も含めて、「3世代交流」をテーマに活動していきたいと思っています。芸能界やショービジネスの世界では真ん中の世代を対象にすることが多くて、「ココロからダンス」で高齢者の問題に取り組む機会をいただきました。それに加えて今度は幼児教育に関するプロジェクトも進めることになっていますので、それらをすべて縦につないでいきたいと考えているのです。

それは「ウィ・アー・ザ・ワールド」の反省と進化です。皆で仲良く横に手をつなぐことは、素晴らしい面もあった反面、取りこぼしたものもたくさんあったと思います。これからは横だけではなく、自分が真ん中だとしたら下にいる子どもたち、そして上にいる先輩や高齢者ともつながっていく世界が求められているのではないかと思います。

具体的な仕事はそれぞれの現場でこれから出てくると思いますが、そのような

世代を超えた大きなプロジェクトを進めることで、私自身が成長し続けることができるでしょうし、結果的に社会に貢献することにもつながっていくのではないかと思います。

縦の数珠つなぎの説明は難しいのですが、例えば昔は、おじいちゃんやおばあちゃんが子どもたちにわらべ歌を歌ってあげたりしましたよね。「せっせっせーのよいよいよい」とか「とおりゃんせ、とおりゃんせ」とか。今の時代はそうしたコミュニケーションは少なくなってい

るでしょうから、今度は逆に子どもたちが「おしりかじり虫」のような踊りを覚えたら、それをおじいちゃん、おばあちゃんのベッドサイドに行ってやってあげる。

私たちは「ベッドサイドのエンターテインメント」と言っていますが、今、そうした世代を超えたコミュニケーションを提案できれば、子どもたちが10年後、20年後に大人になって、今のお母さんたちがおばあちゃんになる頃には、それが当たり前の前の中になっているかもしれ

ません。そんな縦の数珠つなぎの世代間交流を国境や言語を越えてどんどん伝え、笑顔を生んでいきたいと思っています。

—— 高齢者に健康で長生きしてもらうことは私たちの願いであり、それが仕事であることが私たちの自慢でもあります。私たちにできることがあればぜひ協力させていただきたいと思います。本日は本当に感動しました。ありがとうございました。

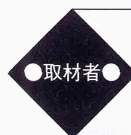
今さら申し上げるまでもなく南流石さんは振付師の第一人者です。本誌の編集を6年も担当しているとはいえ、インタビューが始まる前は少し緊張していました。しかし南流石さんは質問に対して笑顔で丁寧に答えて下さり、いつの間にか緊張は解れていました。

プロフェッショナルとして仕事に対するやりがいと、その準備期間にある重要さと厳しさ、そして結果を出した時のみに得る喜び、さらに若手への指導について等、読者の皆さんにも共感できることが多かったのではないかと思います。

現在、南流石さんが力を入られていることの一つに、「ココロからダンス」という認知症予防の運動プログラムがあります。NHK教育テレビで放映され、今回の取材の発端ともなったのですが、皆さん

はご覧になりましたでしょうか。驚くことにこの運動の普及を、南流石さんやその仲間の方々によるボランティアにより現在も続けられています。私たちにも何かお手伝いできたらとの思いです。

取材を終えて、南流石さんはプロフェッショナル中のプロフェッショナルであり、熱い方だと確信しました。予定の2時間はあっという間に過ぎ去り、時間をオーバーしてしまいました。南流石さんには次のご予定がございましたのに、大変申し訳ございませんでした。



●取材者●

日技広報部 衛藤勝也

日技事務局 平野茂徳